

## 神泉苑での雨乞い伝説

嵯峨天皇の823年(弘仁14年)、東寺は空海に、西寺は守敏(しゅびん)に下賜され、それぞれ管主に就く。その以前から空海と守敏とは何事にも対立していたと言われる。824年(天長元年)、即位して間もなくの淳和天皇は、喫緊(きっきん)の政治課題の解決に素早く動いた。7年連続で長引く干ばつに対して、東寺の空海と西寺の守敏に対して祈雨の修法を命じたのである。

守敏が1週間にわたって修法を行うも効果少なく、次に空海が当時大内裏に南接していた神泉苑にて修法を行うが1滴の降雨もない。

調べると空海の名声を妬む守敏により国中の龍神が瓶に閉じ込められていた。しかしただ1体、善女龍王だけは守敏の手から逃れていたので天竺の無熱池(むねっち)から呼び寄せて国中に大雨を降らせたという。



善女龍王像 長谷川等伯・画



神泉苑の善女龍王社

ちなみに、雨乞いについて少し触れおこう。

[イスラーム世界](#)には「イスティスカー」と呼ばれる降雨祈願があり、[マムルーク朝](#)時代のエジプトでは[増水祈願](#)と呼ばれる大規模な雨乞いが行われていた。

[南方熊楠](#)によれば、[モンゴル](#)に鮓苔師(ヤダチ)と呼ばれる雨乞い師がおり、盆に牛の結石(鮓苔と呼ばれる)と水を入れ、呪文を唱えながら雨を降らせたという。

日本でも各地に様々な雨乞いが見られる。大別すると、山野で火を焚く、神仏に芸能を奉納して懇請する、禁忌を犯す、神社に参籠する、類感(模倣)呪術を行うなどがある。

山野、特に山頂で火を焚き、鉦や太鼓を鳴らして大騒ぎする形態の雨乞いは、日本各地に広く見られる。神仏に芸能を奉納する雨乞いは、近畿地方に多く見られる。禁忌を犯す雨乞いとは、例えば、通常は水神が住むとして清浄を保つべき湖沼などに、動物の内臓や遺

骸を投げ込み、水を汚すことで水神を怒らせて雨を降らせようとするものや、石の地蔵を縛り上げ、あるいは水を掛けて雨を降らせるよう強請するものであり、一部の地方で見られる。神社への参籠は、雨乞いに限らず祈祷一般に広く見られるが、山伏や修験道の行者など、専門職の者が行うことも多い。類感呪術とは、霊験あらたかな神水を振り撒いて雨を模倣し、あるいは火を焚いて煙で雲を表し、太鼓の大音量で雷鳴を真似るなど降雨を真似ることで、実際の雨を誘おうとするタイプの呪術である。このタイプの雨乞いは、中部地方から関東地方に多い。

関東では、雨乞いとしては「大山」が有名である。縄文時代より、雨乞いの山として原始信仰の対象であった大山は、奈良時代に仏教が伝来すると、神仏が習合して山岳信仰として更に発展し、奈良の大仏建立で有名な良弁僧正が755年に大山寺を開基、弘法大師が第三代の住職となった。「大山」については、私のホームページを参照されたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/ooyama1.html>

文献に見える最古の雨乞いの例は、『日本書紀』皇極天皇元年（642年）の条の記述である。これによると、7月25日から蘇我蝦夷が雨乞いのため大乘経を輪読させたが、微雨のみで効が見られなかったので同29日に止めさせた。しかし、8月1日に皇極天皇が天に祈ると、突如大雨が降り、天下万民は共に天皇を称えたとある。この記述以前にも、平安時代に編纂された仏教史書『扶桑略記』には、推古天皇33年（625年）の条に、高麗僧惠灌に命じて雨乞いの儀式を行わせたという記述がある。

なお、雨乞いについては、神泉苑での空海の雨乞いだけでなく、強力な呪力を持つ名僧の雨乞いとして日蓮の雨乞いがある。私は、雨乞いのみならず疫病を防ぐ呪力を「自然呪力」と呼んで、それが科学的にあり得る現象であると考えており、いずれ機会を見てその説明をしたいと考えている。ここではとりあえず雨乞いというものが決して迷信というようなものではないとだけ申し上げておきたい。

